

2020.4

春夏

No.110

思文閣出版

# 鴨東通信



◆ 日常語のなかの歴史 23  
まがさす【魔がさす】

◆ 近藤瑞木

◆ てーたいむ

創造された歴史、解釈された神話

—— 日本書紀成立三三〇〇年にむけて ——

◆ 斎藤英喜 ◆ 山下久夫

名所「左富士」の成立

◆ 片平博文

琉球人がマラッカで買った酒

◆ 中島榮章

韓国に残る近代日本の痕跡

◆ 鄭銀珍

復元模写のその先

—— 模本からの復元を考える ——

◆ 阪野智啓

◆ リレー連載(4) 先読み! 二〇三〇年の人文科学

「私塾」が拓く(かもしれない)未来

◆ 師 茂樹

◆ 史料探訪 71

浅井忠《武士山狩図》

◆ 和田積希

齋藤英喜（佛教大学教授）  
山下久夫（金沢学院大学名誉教授） 編

5月刊行予定

A5判上製・四五〇頁／本体八、五〇〇円

# 日本書紀 一三〇〇年史を問う

古代から近現代に至るまで、日本書紀を読むという行為は、その時代固有のあらたな「歴史」や「神話」を創造していく、能動的な知の運動であった。日本書紀編纂より一三〇〇年を迎えたいま、国文学、歴史学、神話学、思想史研究などの多領域から、日本書紀の受容史を問い直す。

## 【目次】

序文（齋藤英喜・山下久夫）

### I 古代

成立前後の日本書紀（関根 淳）  
天文異変と史書の生成——舍人親王の作品としての『日本書紀』（細井浩志）  
日本書紀と殯宮儀礼——モガリ（殯）のアルケオロジイ（呉 哲男）  
〔研究ノート〕日本書紀とシャーマニズム（アンダウヴアマラル）

### II 中世

〔釈日本紀〕、『日本書紀纂疏』から『神書問塵』へ——中世における〈注釈知〉の系譜をもとめて（齋藤英喜）  
『八幡宇佐宮御託宣集』の「神代」と「日本紀」（村田真一）  
伊勢の日本紀——道祥と春瑜の『日本書紀私見聞』をめぐる（星 優也）  
神仏を生む中世の神代巻——大日靈貴から天照、大日靈から大日如來（松本郁代）  
中世神学と日本紀——二三〜四世紀における至高の神と靈魂の探求（小川豊生）  
〔研究ノート〕スサノヲの「悪」をめぐる（佐藤 誠）  
——『釈日本紀』から『日本書紀纂疏』の変遷を考える（鈴木耕太郎）

### III 近世

〔附会〕と「考証」のあいだ——垂加神道の『日本書紀』解釈（齋藤英喜）  
忌部正道『神代巻口訣』と忌部神道（伊藤 聡）  
近世儒者の神代巻批判と「神道」上古——鈴木貞斎に即して（松川雅信）  
宣長『古事記伝』と胤胤『日本書紀伝』——起源神話の創造として（山下久夫）  
近世日本における「天壤無窮の神勅」観（前田 勉）

### IV 近代

初期ジャバノロジストと日本書紀の翻訳（平藤喜久子）  
教派神道の『日本書紀』解釈と朝鮮布教——佐野経彦の「建白書」を中心に（権 東祐）  
読み替えられた『日本書紀』の系譜と折口信夫（齋藤英喜）  
近代歴史学のなかの『日本書紀』——建国神話を中心として（田中 聡）

日常語のなかで、

歴史的語源や

エピソードを取り上げ、

研究者が専門的視野から

ご紹介します。

## 日常語の なかの歴史 23

まがさす

### 魔がさす

「根性に魔がさいて大分人の金を誤り」とは、近松門左衛門の世話浄瑠璃『冥途の飛脚』（一七二二年初演）で、息子忠兵衛が客の金を横領したことを嘆く、実父孫右衛門のせりふである。『日本国語大辞典』では、見出し語「まがさす」の初出は本作であり、意外に古い用例が見当たらない。近松の『堀川波鼓』（一七〇七年初演）のヒロインお種が己の不貞を悔いる台詞に、「我が身に悪魔の魅入りか」とあるのもこれに類するが、人間の信じがたい行ないに「魔」の介在をみる表現である。

「魔」は、梵語

「魔」は、梵語

manaの音訳「魔羅」の略であり、釈迦の降魔伝承に代表されるように、修行を妨げ、人に災いをもたらす悪神を意味する。「悪魔をしたがへ、仏法を守り」（『善心集』）、「刀八毘沙門の悪魔降伏のために」（『保元物語』）などのように、仏敵としての「悪魔」の呼称も古くから用いられてきたが、この語は『日葡辞書』[Acuma]の項に[diabo]（ギリシャ語のディアボロス、ヘブライ語のサタンに相当）とあるように、キリスト教の

文脈でもつとに神の敵対者たるものの名に宛てられた（ギリスタン版『おらしよの翻訳』に「あくまをはらひ」と見える）。東西の宗教はともに「悪」（へと人を導くモノ）を擬人化していたわけだが、江戸時代には「通り悪魔」と呼ばれる、人にとり憑いて狂わせるモノの俗信もあった。

ただし『冥途の飛脚』の用例はあくまで慣用句としての表現であって、孫右衛門は息子の罪を本気で「魔」に転嫁しているわけではない。むしろ非現実的な表現を抑えた世話浄瑠璃は、「魔」の内面化を促したジャンルだったと言える。『冥途の飛脚』には忠兵衛の無意識の行動を「狐が化かすか」と表現した下りもあり、与兵衛の不条理なお吉殺しで知られる『女殺油地獄』には、「二十年來の不孝、無法の悪業が。魔王となつて与兵衛が一心の眼をくらし」という文言もみられる。近松はこのような条理を超えた人の心の不思議を見すえた作家であった。

（近藤瑞木・東京都立大学大学院人文科学研究科日本文学教室教授）

ていーたいむ

## 創造された歴史、

## 解釈された神話

——日本書紀成立一三〇〇年にむけて

齋藤英喜

(佛敎大学文学部敎授)

山下久夫

(金沢学院大学名譽敎授)

日本書紀研究史の「とらえ直し」を目標してまとめられた論集

『日本書紀二三〇〇年史を問う』が刊行されます。編者のお二人に、

お話を伺いました。

——いまなぜ日本書紀なのか。本書のもくろみを教えてください。

齋藤..二〇一二年は古事記編纂から一三〇〇年ということで、そのときは様々な展示会や出版イベントがあり、かなり世間的に盛り上がりました。ところが今年、二〇二〇年は日本書紀の一三〇〇年紀なのですが、ほとんど盛り上がっていません。盛り上がっていないんですけれども、じつは歴史的には、古事記よりも圧倒的に日本書紀の方が長く「正史」として読まれてきました。そのことをまず今回の本ではとりあげたいと思います。

山下..なんであまり盛り上がってないのでしょね。

齋藤..やはり本居宣長の影響が大きいのだと思います。近世までは日本書紀がメジャーな歴史書だったのが、「いや、古事記が本流なんだ」と、宣長によって価値観がひっくり返ったわけですよ。その成果が『古事記伝』で、それが近代、ひいては現代における古事記の評価を定めている。

山下..その宣長像を、私は壊したいと思ってるんです。宣長はけっして日本書紀はだめで古事記こそが正しい、というようなことをいったわけではありません。宣長は「日本書紀は漢意だ、中国の陰陽思想によるものなんだ」と言いながら、実際には『古事記伝』で日本書紀をたくさん利用しているわけです。古事記を日本書紀よりも重視したという話ではなく、古事記とか日本書紀とか

を駆使しながら、それらを超えた古代像を求めたのであり、同時に宣長の生きた近世（一八世紀）という時代状況に立ち向かいつつ新しい神話をつくろうとしたと捉えるべきだと思います。私はこれを「近世神話」と呼びたい。

斎藤…これは宣長に限った話ではなく、日本書紀は、単に受容されてきたとか、教義や注釈によって受け身的に読み継がれてきたとかいうものではなくて、日本書紀を読むことによって、その時代その時代の新しい神話や歴史が生み出されてきたんだ、ということに今回の論集では力点を置きたいと思っています。

山下…同感です。

## ■「正史」として一三〇〇年、日本書紀を読みかえてきた人々

斎藤…日本書紀の受容の出発点は平安時代前期の朝廷主催「日本紀講」にあります。日本書紀を注釈したり解釈したりして講義をする集まりですね。今回の論集でもとりあげていますけれども、日本書紀は神々の世界の話だから、神祇官などの祭祀をする人たちがト部氏とか中臣氏とか、そういう人たちが注釈するのかなと思ったり、一切彼らはタツチしない。では、誰が注釈するかということ、当時の大学寮の博士たち、つまり中国の歴史や文学を専門にする学者たちが日本書紀を注釈していく。

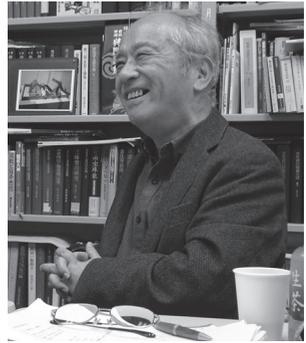
日本書紀自体がもともと中国の思想の影響を多く受けているので、彼らが専門であるということなのですが、では平安時代の学者たちが日本書紀を読んでいくときにどうやって読んだかということ、当時の最先端の学問知識を媒介にしながら読んだわけです。た

とえば陰陽思想からは、アマテラスは天皇の先祖だが、なぜそれが女神なのか、という疑問がでてきます。女性も陰陽で考えると「陰」になります。しかしアマテラスは太陽神だから「陽」でもあると、そういう矛盾がでてきてしまう。そのことをめぐって議論しています。

一方で古事記の「古語」をふまえて「陰上」（日本書紀・書九の文字を「蕃登」と読むと講義しており、日本書紀の漢文をそのまま「訓読」するのでなく、漢文のむこう側に日本の「古語」としての神話を創造する運動も見てとれるわけです。

南北朝から室町になると、宋学という知識が入ってきます。宋学の中の一つに、天文学がありました。すると今度は天文学の知識を応用しながら、太陽の女神アマテラスについて論じていくわけです。これがなかなか面白い。

日本書紀を読むと、アマテラスの名前として、天照大神、天照あまてらす大日靈女尊、大日靈貴の三つがでてきます。そうすると、なんで太陽は一つなのに名前が三つあるんですかと、こういう疑問がでてきますね。その疑問に対して天文学の知識を活用した答えが、「太陽は季節によって位置と日照時間が変わるが、日照時間が同じ春分と秋分をまとめて一つと数えると、あとは冬至と夏至で三つの季節ができる。その三つの季節にあわせてアマテラスの名前が三つあるのだ」というものです。現代から見るとまったくのトンデモ理論ですが、でもそれは当時の最先端の知識を応用した解釈でした。そういうふうに、時代の最先端の知識を媒介として日本書紀を読むことが、それまでの時代にはなかった解釈を生み、当時



斎藤氏

の新しい神話をつくっていく力になったのです。

近世になると、今度はヨーロッパの天文学が入ってきます。そのヨーロッパの天文学によって生まれた「近世神話」については、山下さん、どうでしょうか。

山下..また宣長の話になりますが、宣長の『古事記伝』にも西洋天文学の知識が応用されています。たとえば有名な言葉に「天照大御神は現に目に見える太陽である」(『古事記伝』六之巻)と、宣長はこういうふうに見える太陽ですね。これはもう明らかに、西洋天文学的な物質としての太陽と、神話の世界での古言、古語とをクロスさせています。

斎藤..アマテラスが天体上の太陽と結びつけて捉えられたのですね。当然、地球という天体も認識している。そうすると、地球のあらゆる地域は太陽によって照らされるので、この日本の神であるアマテラスは世界的な神であると、そういう発想にも展開するわけです。

山下..そんなふうに全部言っちゃったら、私が出る幕がなくなるじゃないですか！(笑)

### ■近世の世界観と日本書紀

斎藤..そういう発想から、日本の中心性、「だから日本は優秀な国なんだ」なんていうかたちの、いわゆるナシヨナリズムが発生してきて、近代の問題に展開したのだ、という見方もあります。近代のある種のナシヨナリズムを生み出す思想的根拠が宣長にあるんじゃないか、またはその過激な形態が平田篤胤じゃないか、という批判にはどう応えていけるのでしょうか。

山下..難しいけれど、重要な問題ですね。近代のナシヨナリズムの原型が、宣長や篤胤にあるというような言説は一般的なものです。そういう見方ではもう何も見えてこないと思います。

天照大御神が万国を照らす、と主張したのは、日本を中心に世界を支配するという面だけではなくて、ある種のグローバルな世界の求め方、世界の「起源」を求めるといふ思想の問題でもあります。それが、インドや中国にはいろいろなものがあるけれどもその大元は日本なんだと、「起源」が日本に残っているんだという言い方で表れたわけです。

これは篤胤にしても、『印度蔵志』<sup>いんどぞうし</sup>などで一生懸命に仏教の研究をしたり、中国の研究をしたりしているのですから、日本だけを己の世界としていたわけでないことは明らかです。そういうふうな空間の位置づけ方と言いますか、一八世紀から一九世紀における一つの世界観のあり方として見ていかないといけない。簡単に

近代のナショナリズムや侵略主義の問題にもつていくのは、非常に困ってしまいます。とくに近世の国学なんかを見る場合は、それが大事だということですね。これを強調しておきたいです。

**斎藤**…近世にはアマテラスがすべての地上を照らす太陽という普遍的な神として認識されるようになりました。一七世紀から一九世紀当初の、藩単位ではばらばらに生きていた人たちにとっては、はじめに藩を越えた新たな価値観の「皇国の古人」が認識されたわけですよ。それは「日本人」という概念が変わっていきますけれども、幕藩体制とは違う思想というか認識というか、自分たちの起源が共通の「皇国の古人」にあるんだという考え方をもちましたという意味で、まさに「近世神話」によって、人々の生き方の起源がつけられていったんじゃないか、というふうに思いますね。

**山下**…まったくその通りです。一八世紀から一九世紀になると、交通の発達によって旅人たちが色々と情報交換をするようになりま



山下氏

した。そのことによって、自分たちの藩や村、これを私の言葉では「おらが藩」「おらが村」といつているんですが、そういった自分たちの領域というものに対して非常に自覚的になる。私はそれを「地域主義の覚醒」と呼んでいます。己をとりまく空間のとらえ直し、空間価値の再発見です。しかしこれは、けっして藩や村に閉塞するのではない。むしろ、そういった意識を越えた、ある種の「日本」というのかな、もっと大きな括りで世界を感じとる知とつながるものですね。そういう動きのなかで、「アマテラスは万国を照らす」という認識ができていくわけです。

自分の足元をとらえ直す知は、同時に世界性（中国、インド、西洋にも通底するもの）を求める知です。こうした知の広がりが宣長や篤胤の言説につながっていくんです。現代から見ると非常に誇大妄想的に思えるんですけども、それがその当時のグローバルな世界の、ある種の求め方だったという点をもっと深く考えるべきです。

### ■近代の展開をどう捉えるか

**斎藤**…近代に、いわゆる西洋の学問が入ってきて新しく展開するのは、神話学の問題ですよ。近代神話学のなかで日本書紀がどのように読まれていくのか。そういう新しい視点が外から入ってきた一方で、今度は日本の側が海外——とくに中国、韓国——に侵出していつて、いわゆる植民地をつくっていくわけですが、これにともなってさまざまな教派神道が布教に行っています。そしてこのときに、日本書紀を用いているのです。本書中の論文では、スサノヲが韓国の檀君という神と同一であるという説明でもつて

布教がなされていく様子が論述されました。

**山下**…これまで話してきたように、中世でも近世でも、その時代にふさわしい形で新しい神話をつくっている。それと同様に、近代の教派神道の朝鮮布教に際してもまた、神話が新たにつくりだされているという、重要な研究ですね。その意味で「スサノヲⅡ 韓国の檀君」といった形に変貌するのは興味深い。もっと深く掘り下げるべきだと思います。

## ■現代の日本書紀研究

**山下**…近代も近世も中世も、日本書紀は国の正史であるといわれますが、じつはこの「正史」の意味も、各時代でものすごく揺らいでいます。これはどういう意味で正史といえるのだとか、どういう意味で日本書紀は重要なんだとか、そういう議論がずっと存在しているのです。

日本書紀が編纂された当時も、記紀以外の多数の歴史書があった、日本書紀のなかでは或本あるほんに曰くとか、一書に曰くとか、一本曰く、別本曰く……と、そういう言葉がずっとでてくる。日本書紀も絶対的な書物としてそこにあつたわけではなく、やっぱり相対的な「いろいろあつたなかの一つ」だったのだと考える必要があるということです。だから「記紀」というような、古事記や日本書紀の一つの固定した自明のテキストとして考えるところから出発しすぎてはいけないうのが、私の考えです。古代の専門家ではないので、すこし歯切れが悪くなりますけども。

**斎藤**…日本書紀研究の主流はなんといつても古代史です。その古

代における日本書紀の研究テーマは、古代国家の成立とか、古代の天皇の問題、それと先ほどもおっしゃったように、古代には日本書紀以外にもさまざまな史書があるわけだから、そういうものとの関係が国家の成り立ちとどうつながっていくのか。それが一つの課題になっているかと思うんですね。真正面から扱えなかったのですが。

**山下**…その通りですね。

**斎藤**…あとは古代国家と天皇の関係ですね。これは中世・近世・近代にもつながると思うのですが、日本の国家と天皇のあり方がつねに二重になっていることです。たとえば天皇を中心とした内廷的な組織と、律令を中心とした外廷的な組織が二重になっていて、つねにそれが緊張関係、または相互に補完しあう関係になっている。これはすでにいわれていることだと思うのですが、なぜ八世紀に古事記と日本書紀が同時に編纂されたのか——最近は、古事記は八世紀に編纂されたものではないという議論もあります——、これは八世紀の国家の成り立ちが関係していて、古事記というのは天武天皇の内廷的な組織を表していて、日本書紀というのは天皇を律令のなかに位置づけていくような外廷的な組織のなかでつくられていく。そういう二つの組織のあり方が、古事記と日本書紀の二つが同時に生まれたことの意味じゃないかな。

これはかなりの暴論なんですけど、日本の歴史を見ていくと、たとえば鎌倉幕府と朝廷とか、室町幕府と朝廷とか、あと江戸時代も、結局は幕府と朝廷というかたちでつねに権力や権威が二重化されている。それは近代になってくると、今度は議会と宮中とか、

または内閣と宮中というかたちで、やはり二重になっていて、それは最終的に、どちらに責任の所在があるのか曖昧になって勝手に戦争が始まってしまったと、そういうような言説にもつながりますけれど、そうした現代にも通じる問題を解き明かすひとつのヒントみたいなものが、古事記と日本書紀がなぜ八世紀に成立したとされるのかという議論のなかに隠れているのかもしれない。**山下**…斎藤さんのおっしゃることは暴論ではないと思います。近世でも、幕府と天皇・朝廷の関係は、庶民の受け取り方も含めて、複雑で興味深い問題が明らかにされつつあります。そのうえで、宣長や篤胤の言説の読み替えも必要になってきます。日本書紀が正史となっていくことの意味から導き出せる議論でしょう。

——最後に、『日本書紀一三〇〇年史を問う』刊行にあたっての**意気込みや、今後の展望などお聞かせください。**

**斎藤**…今回は総勢一八人の執筆者で、古代から近代まで全範囲をカバーしようと試みました。とはいえ、当然ながらやはりカバーしきれない問題も残っていますので、それは今後の課題です。また逆に、今回の論集によって提起される問題もあり、次への大きな起爆剤となると期待しています。

**山下**…とくにこういう企画の場合ですと、これで終わるわけではなくて、次にどのようなものを生み出していくか、そのステップとしてあるわけですから。国文学・歴史学・思想史・神話学、という多領域にわたって、その時代固有の歴史を創造していく、という問題に取り組んで、そうして行きついたら次の出発点

になる、それも一つの魅力かと思います。

**斎藤**…本書の特徴というか、「売り」は、三つあると思います。一つは、日本書紀一三〇〇年史の、古代から近現代までを通しての、日本書紀のたんなる受容史ではなく、注釈・解釈・研究を通して、その時代固有の、あらたな「歴史」や「神話」を創造していく、能動的な知の運動を積極的に捉えたことにあります。

もう一つは、本書の執筆者の陣容が、国文学、歴史学、神話学、思想史研究などの多領域にわたっていることです。本書の試みは、従来の国文学、歴史学といった、一つの閉じられた学問プロパーを超える方向性を提示しえているのではないのでしょうか。日本書紀一三〇〇年史を問うこと自体に、現在の学問プロパーの閉鎖状況を打ち破る起爆剤が仕掛けられていたといってもいいかと思えます。

そしてもう一つは、今回の論集には、多くの若手の研究者が参加したことです。本論集のそれぞれのテーマに向き合うことで、自分たちの研究の方法や立場を問い直していくという、ある種の緊張感みたいなものが、各論文にみなぎっているように思います。また本書の作成のためには、一年半にわたる研究会を行いました。そこでの議論が、それぞれの執筆者の論文に反映されていることは間違いありません。

という感じで、かなり「自画自賛」ですが（笑）、そうした本書の試みがどこまで実現できたか、多くの読者の方たちにぜひとも確かめていただき、次への議論が展開できればいいなと思います。

# 名所「左富士」の成立

かた ひら ひろ ふみ  
片平博文

歌川廣重の代表作ともいえる浮世絵『東海道五十三次』の「保永堂版」や「隸書版（丸清版）」には、吉原宿（静岡県富士市）付近の風景として「左富士」が描かれている。名の由来は、進む道の左側に富士の眺めが見えることによる。江戸から東海道を京に向けて上るとき、その北側に位置する富士は必ず道筋の右側に望めるはずである。しかし宿場の手前で道が大きく内陸側に湾曲していることで、富士の山全体もそれに連れてにわかには動き、左側から見える一瞬がある。やがて、そこが街道屈指の名所にまでなった。実はこの風景、五街道が整備された江戸時代初期から存在していたわけではない。

吉原の宿場は当初、現在のJR吉原駅よりもさらに海に近い海岸砂丘上にあつた。元吉原宿と呼ばれているのがそれである。ところがそこは海からの風が強く、飛砂によって宿場の施設が砂に埋もれるようなこともあり、寛永十七年（1640）になって約1.9km北西側のやや内陸となる中吉原宿に移転した。飛砂の直撃こそ無くなったが、移転した宿場がまたも深刻な自然災害の被害を受けたのは、延宝八年閏八月六日のことである。それは今の暦、す

なわちグレゴリオ暦に置き換えれば1680年9月28日に相当する。

今の9月下旬といえば、まさに台風襲来シーズンのピークとなる。前日の閏八月五日夜からこの日にかけて、少なくとも江戸など関東地方や東海地方南部の海浜地域は、台風による大雨・暴風の被害に見舞われた。また南寄りの強い風をまともに受けて、沿岸部では大規模な高潮も発生したらしい。『徳川実紀』や『玉露叢』には、その時のようすが詳しく記されている。

江戸では城中の屋根瓦や壁土が剥がされ、城下においても数え切れないほどの武家・商家の建物が傾倒・顛倒している。その数は、完全に倒れてしまった家屋だけでも三千四百軒余に及んだという。また、本所・深川・永代・両国・築地・芝などウオーターフロントにあつた邸宅や商家・民家などは、軒並み床上四尺〜八尺（一尺は約30cm）もの高さに及ぶ高潮被害を受け、七百余りの人が溺死し、蔵に貯蔵されていた二十万石以上の米が瞬く間に海水に浸かってしまった。

駿河・遠江では、駿府（静岡市）のほか掛川・横須賀（掛川市）・浜

松においても、城郭施設の風損や城下への洪水または高潮によって多くの屋敷・家屋が流され、溺死する人も相次いだ。さらに三河の吉田（豊橋市）でも、建物の倒壊や多数の死者が出ている。

台風による被害は、駿河湾奥に位置する当時の吉原宿（中吉原）や東隣の原宿付近においても例外ではなかった。両宿場でも、駿府をはじめその西側に位置する掛川・吉田に至る城下町と同様、家屋の倒壊や高潮によって多数の人びとが命を落としている。この高潮によって発生した大波は、地元に残る史料では「大津波」という言葉で伝えられた。巨大な波の襲来は、あたかも地震直後に発生する津波のように激しいものに見えたのだと思われる。中吉原は、現在の海岸線から2 km以上も離れた内陸に位置していた。しかし宿場付近の標高は、わずか3〜3.5 mに過ぎなかったのである。台風という低気圧と、南寄りの暴風に押されて海岸線を越えた大波は、なめらかで平らな地面を滑るかのように、容赦なく内陸へと浸入したのだろう。高潮が去ったあと、宿場に並んでいた家屋は一軒もなかったという。紛れもなく、壊滅的な打撃であった。

この台風のたどった進路であるが、少なくとも吉田―浜松―掛川・横須賀―駿府―吉原・原―江戸と大きな被害が出ていることより、東海地方から関東地方の南部を、西南西↓東北東方向に通過していったことは間違いない。しかも、吉原宿に残る地元の史料には、「六日の夜明け頃から北東の風が吹き始め、やがて東風へと変わり、朝になって南東からの風が強く吹いた」とあることから、駿河湾奥の地域では両宿場よりも北側、すなわちやや内陸側をかすめて江戸の方向に進んでいったのだろう。そして夕刻に

は風も和らぎ、北寄りの風に変わっていた。いわゆる台風の一返し風（吹き返し）である。また江戸でも、激しい南風とともに規模な高潮が発生していることから、市街地よりも北側を通過していったと考えられる。

この結果、吉原宿はまたも全面的な移転を強いられることとなった。台風から約二年の歳月を経て、宿場町は新しい地を選んで見事に復旧・復興した。現在、新吉原（現吉原本町）と呼ばれているところがそれで、中吉原からさらに約1.2 kmの内陸側である。以来幕末に至るまで、その地を動くことはなかった。

当然、東海道は新しい吉原の宿場に向けて再びルートの変更が必要となったわけで、直ちにその工事が行われた。新しい東海道は、新吉原宿と連絡するため、僅かではあるがさらに内陸側へと移動することとなった。その時、新しいルートの一部が近くを流れていた和田川流路の自然堤防に沿って建設されたことで大きく湾曲し、その部分の道筋は北よりもやや東側の方に、すなわち富士山を左側に望む方向になったのである。誰もが意図しなかった偶然の重なりから、名所「左富士」が誕生した瞬間であった。

「左富士」については、すでに寛政九年（1797）に刊行された『東海道名所図会』にも項目を設けて掲載されている。災害が新しい名所を生み出した。皮肉な誕生劇ではあったが、人と自然との関係は本当に複雑なものである。

（立命館大学特任教授

## 『片平博文』貴族日記が描く京の災害

A5判上製・四一六頁／本体五、〇〇〇円 ▼詳細24頁

# 琉球人がマラッカで買った酒

なか じま がく しょう  
中島 楽章

私はこの一〇年ほど、大航海時代の東アジア海域に関するポルトガル史料に関心をもち、しばしばリスボンを訪れた。夏休みであれば国立図書館などで文献を調べたあと、夕方には市街地を歩いて回った。その中心部には、ジンジーニャというリキュール専門の小さな立ち飲み屋が何軒かある。ジンジーニャとは、ブドウの果汁やその搾りかすを醸造した原酒を蒸留したアグアルデンテというスピリットに、サクランボやシナモンなどを漬けこんだものだ。以前は小さなカップにサクランボが一粒入って一杯ユーロぐらいだった。甘いジンジーニャをなめながら夕暮れのリスボンの町並みを眺めるのはなかなか気分がいい。

さて、大航海時代の海域アジアに関する代表的な史料として、マラッカの商館員だったトメ・ピレスの『東方諸国記』があり、特に一六世紀初頭までマラッカに来航していた琉球人の交易活動を詳記することで知られている。その和訳本には、琉球人はマラッカ産の酒を非常に珍重し、「ブランデーに似たものを多量に積荷する」という一節がある（岩波書店、一九六六年、二五〇頁）。琉球人がマラッカで爆買いしていた「ブランデーに似た酒」とは、どのよう

なものだったのだろうか？

琉球の泡盛の原型は、インディカ米を原料とするシヤム産の蒸留酒「ラオ・ロン」ともいわれる。しかし「ブランデーに似た酒」というのは、ラオ・ロンや泡盛とはイメージが異なるようだ。そこで『東方諸国記』のポルトガル語原文を見てもみると、琉球人は「アグアルデンテのようなものを大量に積荷する」とある。

一五〜一六世紀には、琉球人はシヤムのアユタヤ朝からもさかんに酒類を輸入していた。たとえば一五三四年、明朝の冊封使として琉球に渡航した陳侃は、琉球の「南蛮酒」はシヤムからの輸入品で、中国の「露酒」のようなものだとして記している（『使琉球録』群書質異）。露酒とは蒸留酒に果実や薬材などを漬けこんだリキュールで、いわばジンジーニャの遠い親戚である。日本でもアンズを使った「杏露酒」がおなじみだ。

実際に一四六〇・六一年にはシヤムから琉球国王に、「香花白酒」・「香花紅酒」・「蜜林檎白酒」・「蜜林檎紅酒」を贈っており、「香花酒」に「内に椰子あり」と附記するものもある（『歴代宝案』第一集卷三九）。これらは蒸留酒に果実やヤシの実などを漬けこんだ

リキュールで、漬けこむ材料によって紅白の別が生じたのだろう。首里城や今帰仁<sup>なきじん</sup>グスクでは、一五世紀のタイ製の陶器壺が大量に出土しており、これらは「香花酒」などの酒を輸送するための酒壺だったと考えられている。

東南アジア産の蒸留酒は、琉球から朝鮮にも贈られた。一四六二年には琉球使節が、朝鮮国王世祖に「天竺酒」を献上したが、世祖の面前で酒壺を開いたところ、手違いで酒でなく砂糖が入っていたというハプニングも起こっている。後日この琉球使節は「天竺酒」の製法について、「桃榔樹の樹液を蒸留して作り、風味は香烈で、二杯も飲めば終日酔うほどだ」と述べたという(『世祖実録』巻二六・二七)。桃榔樹とはバームシユガー(サトウヤシ)のことだ。現在でも東南アジア各地では、バームシユガーやココヤシを蒸留したアラック酒をさかんに生産している。「天竺酒」もバームシユガーを原料としたアラックだろう。なお旧ポルトガル領のブラジルやサントメ島でも、サトウキビで作ったアグアルデンテが名産となっている。トメ・ピレスが「アグアルデンテのような酒」と述べたのもこの種のアラックにちがいない。

ついで一四六八年の琉球使節も世祖に天竺酒を献上した。世祖はその迎賓宴で待望の天竺酒を賞味したが、宴会後に臣下に対し、「これは天竺酒などではない。使節はどうせ判らないと思って欺いたのだらう」とケチをつけている。翌年、世祖は琉球が献上した天竺酒を文官にふるまったが、「その味は苦烈で飲みにくい」と不評だったという(『世祖実録』巻四七)。「苦烈」という表現からみて、この天竺酒はアラックの原酒だったのではないか。

その後、一五〇〇年の琉球使節は、国王燕山君に「天竺白花酒」を献上した。これは「風味は香烈で温醇」だと好評だったとい、おそらくアラックに果実などを配合したリキュールだろう。あたかも琉球人がマラッカで「アグアルデンテのような酒」を爆買していた時期でもあり、それが朝鮮に再輸出された可能性もある。さらに東南アジアの蒸留酒は、琉球から明朝や日本にも贈られた。たとえば明朝の官僚張瀚は、一五七〇年に福州で琉球から帰航した冊封使郭汝霖を通じてシヤム産の酒を入手し、「まさに異国の風味だ」と評している(『松窓夢語』巻二)。また一五八五年には琉球国王が島津義久に「焼酒蜜甕」、つまり南蛮産の壺に入った蒸留酒を献上しており、翌年には義久が家臣に「南蛮御酒」を下賜したという(『上井寛兼日記』)。

このように『東方諸国記』の一節を、琉球・中国・朝鮮・日本などの関連史料や考古資料と対照することによって、イメージが具体的に広がっていくのが古琉球史研究のおもしろさである。逆にいえば、このような多言語的なアプローチをとらなければ、古琉球史を十分に理解することはできない。『大航海時代の海域アジアと琉球』では、これまで体系的研究が乏しかったヨーロッパ史料を中心に、琉球・中国・朝鮮・イスラーム史料などを併用し、古琉球期の海外交流史の全体像を再検討することを試みた。リスボンのジンジーニャがマラッカの「アグアルデンテのような酒」や、朝鮮・日本の「天竺酒」「南蛮酒」につながるような、ユーラシアの東西にわたる海域交流史の動態が伝われば幸いである。

# 韓国に残る近代日本の痕跡

鄭銀珍 じよん うえん じん

私の故郷は韓国南西部の「南海」という島である。今では大きな橋がかかり、車で簡単に渡ることができる。周りには無人島も含め約一〇〇個の島々が点在し、入り組んだ美しい海岸線や温かな気候に加えて風蘭などの温帯性植物が自生し、その秀麗な自然景観によって「閑麗海上国立公園」に指定されている。

島という特性もあり、漁業に従事する家庭が多く、海にまつわる祭祀や伝説も少なくない。なかでも子どものころに一番印象深く記憶に残っているのが、陰暦の大みそかの夜の、龍王への祭りだ。大勢ではなく、ごく身内で行うお参りのようなものである。日が沈みかけ村が暗闇に静まりつつある時刻を待ち、白い韓服をまとった祖母のうしろについて、龍王への供え物を頭に載せて海岸へ向かう。「お供え物を地面に降ろしたらダメ。そして絶対に後ろを振り向かないで」と強く言われた。

肌をえぐるような海風の冷たさや頭に載せたお供えの重さは、子どもには過酷な試練であった。寒さに歯がガタガタ鳴り、震える手でお供え物を力いっぱい握り、祖母と離れないように歩いたが、後ろから誰かに引つ張られるような感じがする。背筋がぞつとし、

髪の毛が逆立つ。「絶対に後ろを振り向くな」と言われると、かえって本当に誰かいるような気がしてくる。びくびくしながら付いていくものの、祖母の白い服が闇の地平線の奥へとどんどん遠くなる。ようやく波の穏やかな海辺につくとロウソクに火を着け、お供え物をならべ、いっしょに龍王へ祈りを捧げた。

私が田舎にいたころは、このような習俗だけでなく、昔からの器物も時おり眼にした。たとえば、ヒョウタンやユウガオの器を半分に割って水をくむ道具としたバガジというものがあるが、祖母の家ではまだこれを使っていた。また、一九七〇年代の末ごろでも、部屋の外には白磁の壺のようなものが置いてあった。当時はトイレが母屋から離れていたため、夜中に用を足すための尿缶である。

今になって考えてみると、その壺は日本で生産されたいわゆる産業陶磁だったに違いない。私ができることに気づいたのは、つい数年前のことだ。近代以降、日本で大量生産された陶磁器(日用品が韓国へ輸出され、当時、韓国の窯業が衰退する一因になったこととは早くから知られていた。先駆的な韓国陶磁研究者として名を

残した浅川伯教・巧の兄弟も一九三〇年代前半の様子を、「今日に於いては如何なる山間僻地と距も、内地の陶器を使用せざるなきに至った」、「大抵の朝鮮の窯場では交通の便利な所は、日本商品に押されて販路を失って」いると記しているとおりである。

このような近代の日用品的なやきものは、長いあいだ陶磁史研究者の注意を引くことがなかった。大量生産品であり、美術的、工芸的な価値がないと考えられたためだろう。ところが、今世紀に入ってから、韓国内の近代遺跡から出土する産業陶磁が俄に注目を集めはじめた。とりわけ二〇〇八年に発掘されたソウル東大門運動場では、一九〇八年から一九二五年に至る時期のゴミ捨て場跡から日本の近代陶磁が大量に出土し、その後、近代の産業陶磁に焦点をあてた展覧会も韓国内で開かれている。

こうした動向については『鴨東通信』91号ですでに紹介したが、今回、私のはじめの著書『韓国陶磁史の誕生と古陶磁ブーム』が思文閣出版から上梓されることになり、その原稿を整理するなかで近代という時代をあらためて考えさせられた。東アジアの国々にとって、近代は西洋からの衝撃とともに始まる。そののちいち早く近代化を成し遂げることになる日本は、陶磁器の分野でも積極的に海外への展開を図った。幕末からすでに兆していたジャポニスムの波に乗ったのである。その勢いが、中国や朝鮮半島にも及び、韓国の在来窯業に大きな影響をあたえたのだ。

他方で、まさにこの時期に鉄道建設や日清、日露の戦争にともなう各種の土木工事によって地中から高麗青磁が現れはじめ、これを契機として韓国陶磁にたいする近代的な研究が勃興した。とこ

ろが高麗青磁の多くは日本をはじめとする海外へ持ち出され、たとえば高麗青磁の再現品製作で高い成果を上げた韓寿景は、「私たちの国の宝が外国の博物館に流されることになり、それが作られ発達を遂げた故郷には工場産の俗悪な磁器が気炎を吐く」と嘆くことになる。

これにたいして、日本人でありながら日本の「工場産の俗悪な磁器」に対抗しようとしたのが、二〇世紀の初頭に朝鮮半島へ渡った浅川伯教・巧の兄弟であった。かれらはそれまで見向きもされなかった朝鮮白磁を柳宗悦とともに再評価しその価値転換のきっかけを作る一方で、韓国在来窯業の復興を目指した。とりわけ兄の伯教がかかわったと思われる窯のひとつは、ほそぼそとではあるが一九七〇年代まで続き、日本から注文を受けることさえあったと推測される。

近代化が進むなかで価値あるものや新たな価値そのものが発見されながら、他方で何かが失われて行く。近代韓国の陶磁史はそのような複雑な経緯をたどった。だがそれは、陶磁器だけに限られたものではないだろう。私の田舎では龍王の祭りもいつの間にかなくなった。私はそれを実際に体験した最後の世代であったかもしれない。

(大阪市立東洋陶磁美術館学芸員)

鄭銀珍『韓国陶磁史の誕生と古陶磁ブーム』

A5判上製・四六六頁／本体一四、〇〇〇円 ▼詳細31頁

# 復元模写のその先

模本からの復元を考へる

阪野智啓

古典絵画の実技分野の研究方法として、古画の描かれた当初の状態を想定して模写をする「復元模写」というやり方がある。研究方法、としたが、まだ研究という認識がない頃から、所蔵者などの要望に沿って傷んでしまった古画を新しく描き直し活用することは幾度もあっただろう。また、古画を写し伝承する手段の一つとしても、前近代から特に意識されることなく行われていたものと思う。

それが「復元模写」という研究分野になったのは、林功（一九四六～二〇〇〇）の取り組みによるところが大きい。林は模写の分野に蛍光エックス線分析などのいわゆる科学調査を導入し、肉眼観察や経験だけでは読み取れない材料の分析を試みた。科学調査の情報も保存修復分野の専門家と共同して、使用された顔料等ができる限り同定し、さらに今では色がなくなってしまう欠損部分や褪色部分の調査も試みて、検出された情報を復元根拠として見出し、出していた。科学調査という客観的な分析結果を基にする「復元模写」は以降、絵描きの感性に頼る決して学術的とはいえない「想像画」から脱却し、研究分野として保存修復の領域を持つ大学

を中心にして発展していった。

したがって、復元模写は科学調査とともに歩んできた。それは林が復元模写に限らずあらゆる模写において提唱した「同素材・同技法」の理念とも合致して、いまや模写や古典絵画実技に携わるほとんどの関係者の共通認識になっているだろう。「同素材・同技法」とは、和紙に描かれた原本は和紙に、絹に描かれた原本は絹に、天然緑青は天然緑青で模写するということである。なかだか当たり前のようではあるが、古典絵画の図像やあるいは筆法、さらには精神性などを習得し継承しようとした修行に近い模写では、少なくとも「同素材」は重視されてこなかった。しかし科学調査が導入され、さらには描かれた当初の姿の再現を目指す復元模写では「同素材」以外はあり得ず、必然的に素材の同定ができる科学調査は必須のものとなっていった。模写に原本の材料分析が伴うことよって、模写分野と保存修復分野との近接性が高まます高まったことの意義もまた大きいだろう。

そのような復元模写の経緯の中で、筆者が主体者の一人だった「月次祭礼図屏風模本の復元プロジェクト」は、やや傾向を異にす

る。「月次祭礼図屏風模本」（以下「模本」）はあくまで写しであって、原本そのものではない。簡易な彩色で写された「模本」の科学調査はほとんど復元には意味がなく、それまで復元模写を研究として意義付けしてきた科学調査を持ち込むことができない。そこで本プロジェクトで重視したのは保存修復分野との連携ではなく、「模本」を実技や美術史、日本史、民俗等の多分野的な文化資源と捉えて、その多角的な分析によって客観性を求めたことである。

筆者はこのプロジェクトの前に、名古屋城本丸御殿障壁画の復元模写事業に参加していた。現在も続くこの事業は、昭和二〇年の空襲によって焼失した障壁画の復元模写を行うもので、最初は林が、平成一三年以降は加藤純子氏が指導者として進められている。筆者は平成一四年から参加したが、その頃は慶長期の風俗図の模写に取り掛っていたところで、初めての担当場面もやはり風俗図だった。

以降、平成二二年まで風俗図担当だったが、風俗図の復元は、褪色や剝落した顔料の読み込みも確かに大事だが、何よりも描かれた当時の風俗理解が肝要で、欠落したちよつとした部分でも、同時代の絵画資料のコピーを原本写真の周りに散らばらせて頭を悩ませた。歴史資料も読んだが、それぞれの専門家だったらどのような見解を導き出すのかその頃から気になっていた。やはり復元模写は、実技の見解だけでは成し得ない。復元模写は結局のところ、どれだけ顔料分析を入念にしたところで、または歴史資料を読み込んだとしても、その情報を用いる絵描きの感性に左右されるところが大きい。復元模写において、感性という曖昧さを払拭

させることは今後も不可能だろう。

「模本」のプロジェクトでは、名古屋城では叶わなかった美術史や日本史の専門家による画像の分析ができる体制を目指した。これまでの復元模写のプロジェクトでも、保存修復分野との連携だけでなく絵画様式の追及や有職故実の検討など、美術史や日本史分野との連携があり、「模本」のプロジェクトが殊更に異例というわけではない。しかしながらこのプロジェクトでは、復元模写という感性に左右される「モノ」だけが成果ではなく、その研究課程や復元模写から得られた情報を他分野からさらに分析し、研究をより発展させていく手法がより強く打ち出せたように思う。実技分野あるいは復元模写という手法は、さまざまな研究分野と結びつくことのできる媒体のような存在になり得ると考えている。この手法は引き続き発展させていきたい。

令和元年一二月、鴈野佳世子氏らを中心とした、復元模写を考える「絵画の再生——改装・復元・復元根拠」という研究会があった。筆者も登壇させて頂いたが、この場で京都みやこ絵美氏から、絵画技法や材料など復元する根拠を蓄積することによって、災害等で失われた時点で「モノ」として終わりではなく、再生するきっかけを得ることができるという視点が示された。科学調査から始まった復元模写は、新しい研究の形を表す期にさしかかっているように思う。

（愛知県立芸術大学准教授）

岩永てるみ・阪野智啓・高岸輝・小島道裕編

「月次祭礼図屏風」の復元と研究 よみがえる室町京都のかげやき

A4判上製・四四頁／本体一六〇〇〇円 ▼詳細26頁

## 「私塾」が拓く(かもしれない)未来

師（まろ） 茂樹（しげき）  
(花園大学文学部教授)

筆者が専門としている仏教学は、ヨーロッパの文献学などが導入されてきた近代的な学問であるが、遡れば六世紀に仏教が伝来してから連綿と続く学問でもある。奈良時代から中世にかけては、

学侶(学問僧)になることが出世の条件の一つであったので、数多くの注釈書、資料集、討論の記録などが作られた。また江戸時代になつてからは、徳川幕府が仏教界を統治するために学問を奨励したこともあり、やはり多くの学問所、学寮が日本全国に開設されるとともに、またもや数多くの注釈書や講義録が作られ、それ以前の注釈書なども印刷出版され普及した。本山の学寮など、学問の場の一部は仏教系大学などで存続し、博物館や図書館などに寄託された文献もある。一方、地方の寺院にも多くの貴重な文献が伝わっていることが知られているが、中央に比べて調査が進んでおらず、これら膨大な量の学問的蓄積の全体像は、現在のところ明らかになっていない。

筆者は、こういった文献を研究対象としている。寺院にうかがって蔵を開けていただき、目録を作つて複写をする。くずし字などで書かれた文を読み解いて、難解な宗教的、哲学的、思想的意味を検討する。そしてそれを国際学会で発表して、海外の研究

者たちとディスカッションをする。どれも時間と手間のかかる作業であるが、文化財保存から国際的な哲学研究までカバーする幅広さが、この学問分野の魅力かもしれない。

ともあれ、このような調査・研究をやつていて痛感するのは、江戸時代以前の学問的伝統の分厚さである。それは私にとつて研究対象であると同時に、仏教を学ぶ先人の足跡でもある。現在、筆者は大学に籍を置いて研究をしているが、ただか百五十年程度の歴史しかない大学での研究と比べたとき、千年以上にわたる寺院内での学的継続にしばしば圧倒される。「巨人たちの肩に乗る」という言葉があるが、巨人たちの痕跡——学僧たちが書いた書籍やノートが日本の各地には残されており、それらの多くが現在、時間の流れのなかで失われようとしている。

このような前近代から続く学問の流れに触れていると、大学だけが学問の場ではなくてもよいのではないか、という思いがこみあげてくる。特に近年、人文科学は役に立たない、といった言説が流布し、陰に陽に大学における人文科学の縮小が進められていくのを目の当たりにすると、余計にその思いは募ってくる。先人から受け継いできた学問の伝統を伝えるのに、大学だけに頼つてはい

けないのではないかと。仏教に限らず、漢籍や古典など、現在の人文学の前身に当たる諸学が学ばれ、研究されてきた私塾のような組織が、今こそあってもよいのではないかと。

二〇一九年十月、そのような思いを共有する仲間とともに、私塾・上七軒文庫を立ち上げた。学校法人やNPO法人ではなく、合同会社である。大学の理系学部などでは、ベンチャー企業の起業が盛んに行われているが、上七軒文庫もそれに近いのかもしれない。ホームページ (<https://kamishiten-bunko.com/>) に「人文学を後世に伝えるパイパスとしての役割を果たせないか」と掲げている通り、大学と対立したり、大学の役割を否定したりしたいわけではない。モデルとしてイメージしているのは、先に述べたような仏教寺院に作られた学問の場であり、漢学などが学ばれた江戸時代の私塾である。さらには、京都・出町柳で哲学などの講義を展開している個人経営の私塾GACCOH (<http://www.gacoh.jp/>) や、批評家・作家の東浩紀が立ち上げたゲンロンカフェ (<https://genron.cafe.> <http://www.genron.cafe.>) のような現代のオルタナティブ・スペースも、心強い先達である。

現在のところ、代表・亀山隆彦（龍谷大学）と筆者の講義が中心であるが、将来的には、特に若い研究者の講義を増やしていきたいと考えている。最近は大学非常勤講師の口も減っている。四十年代の筆者の同世代には、優秀なのに就職できない——それぞれか世代ごと切り捨てられかねない研究仲間もたくさんいる。少額ではあるが講師料の出る場を作ること、逆境のなかで歯を食いしばって研究を続けている仲間を支えることはできないか、とい

う思いもある。研究者がいなくなってしまうのは、人文学を未来に伝えることも難しくなっていくだろう。

上七軒文庫の運営は、人文学とはどのような実践なのか、という問いを直すフィールドワークにもなっている。たとえば現在の大学教育では、学生が適切に計画を立て、履修することができるよう「順次性のある体系的なカリキュラム」を構築することが求められている。常勤であれ非常勤であれ、大学教員の役割は、「体系的なカリキュラム」の一部を分担することである。教員が自身の関心、テーマに従って講義を行なう、という「特殊講義」的なあり方は徐々に制限されてきている。人文学も例外ではない。一つの古典文献を何年もかけて精読する、といったことは、恐らく人文学の教育・研究両面において重要な活動であろうが、現在の大学教育の考え方には理念上あり得ない。しかし、私塾であれば可能である。実際にそのような講義（『成唯識論』を読む）を開講したところ、本稿執筆時点では毎回ほぼ満席となっている。『成唯識論』十巻は、奈良時代から現代まで研究をされ続けてきた仏教の古典であるが、残念ながら現代語訳がない。それを読んだみたい、というニーズがある。読書会や研究会ではなく、講師がしたいと思うテーマで講義を開き、それをマネタイズする。私塾という形態の可能性を強く感じているところである。

統計によれば、起業から十年後の会社の生存率は二五％程度だという。未来を予測する確実な方法は自分で未来を作ることだ、というが、上七軒文庫も何とか二〇三〇年まで生き残りたいと考えている。

## 浅井忠《武士山狩図》

和田積希

(京都工芸繊維大学美術工芸資料館)

京都工芸繊維大学の松ヶ崎キャンパスの中央に建つ美術工芸資料館は、一九八一年に開館し、現在五万点をこえるコレクションを収蔵している。このコレクションは大学の前身校のひとつ、明治三五年（一九〇二）に開校した京都高等工芸学校において収集された教材を基礎としている。同校は、京都の美術工芸界の発展のため美術的技術と高度な科学的知識をそなえた人材育成を目的に設立された工芸専門の高等教育機関であり、図案科、色染科、機織科の三科を抱え、海外輸出を念頭においた当時最新の教育がおこなわれた。この過程で収集された教材は、国内外のポスターや染織品、美術工芸品、写真資料など多岐にわたり、当時の教員作品や生徒作品、また近年は建築図面などもあわせて収集し、年間つうじて一〇本程度の企画展を実施している。

そのなかでポスター数点とともに、唯一常設的に展示されている絵画がある。洋画家、浅井忠（あらいちゅう、一八五六～一九〇七）が描いた《武士山狩図》である。秋深い山路で狩りを楽しむ三人の武士が描か

れている。

浅井は、東京美術学校西洋画科で教授をつとめた洋画界の大家だが、一方で晩年の五年間を京都で過ごし、関西の洋画界を盛り上げるとともに、この京都高等工芸学校図案科の教授として、図案制作や図案教育に熱心に取り組んだ。浅井を招聘したのは、同校初代校長の中澤岩太（なざわいわた、一八五八～一九四三）である。東京大学出身で京都帝国大学理工科大学学長もつとめた化学者の中澤は、学校創設に際し、図案教育の基礎となるデッサン力の育成のため、浅井を選んだ。図案科にはこのほか、建築家の武田五一（たけだいち、一八七二～一九三八）、洋画家の牧野克次（かつじ、一八六四～一九四二）や都鳥英喜（ととりえいき、七三～一九四三）などが教員として着任している。

さて、《武士山狩図》はその浅井が京都時代に描いた最大の洋画であり、明治三八年に造営がはじまった当時の東宮御所（現迎賓館赤坂離宮）東二の間「狩の間」にかけられた綴織壁掛の原画でもある。つまり図案であるわけである。

当時の東宮御所の壁掛については、フランスでの室内装飾の調査を囑託された黒田清輝（一八六六―一九二四）と宮内省東宮御所御造管局技監として建築事業を統括する片山東熊（一八五四―一九一七）によつてすすめられたが、浅井に直接図案を依頼したのは、製織を担当する川島織物の二代川島甚兵衛であった。

制作の様子を『木魚遺響』（黙語会編、芸艸堂、一九〇九年）に書かれた中澤の覚書を参照しつつ追つてみたい。依頼があつたのは明治三十八年三月頃のこと、浅井は水彩で略画を描いて川島に渡したが、不感から正式な依頼を一度断つてゐる。川島に仲介を頼まれた中澤が東宮御所御造管局事務局長の股野琢に直接依頼の詳細をたしかめて、浅井の説得にあつたという。浅井はあらためて草稿を描いて提出し、当局から概要の許可を得て、原画の制作にとりかかった。京都高等工芸学校では特別写生室を設けて浅井をバックアップしたようである。

現在、当館には本作品を含め、制作の過程で描かれた下絵やスケッチ帖など関連資料一三件が残されている。人物と馬の部分油彩画のほか、全体像を描いた水彩の下絵が複数枚あり、人物の配置、馬の脚の運び、背景の樹木の様子が修正されている。浅井は、実際に狩装束を着たモデルを乗馬させて写生し、入念な構図研究をおこなつた。馬については宮内省の主馬寮にて研究をおこない、写真を残すとともに、武徳会（武道の振興等に関わつた団体）からも馬を借り出して種々の格好でスケッチをしている。このとき使用された装束や弓矢、馬具類は、京都高等工芸学校の標本で、現在も館内に資料として残されている。背景用の木々のスケッチ

や馬具の研究には、図案科一期生であつた洋画家の霜鳥之彦（一八八四―一九八二）と間部時雄（一八八五―一九六八）も参加した。スケッチ帖に記された霜鳥の覚書によれば、樹木の写生は仙洞御所や下鴨神社の境内でおこなわれたようである。

こうした研究を経て、明治三十八年二月に二分の一下絵とよばれた本作品がついに完成した。しかし、宮内省からもつと写実的という注文が入り、浅井は前景中心の画面に奥行感を加え、最終的な構図となつた。

原画の完成後、都鳥や関西美術会の伊藤快彦（一八六七―一九四二）らの協力を得て、綴織の原寸大となる原画の面積約四倍の下絵が制作された。巨大なキャンパスが学内の教員の協力で準備され、明治三十九年二月には浅井は描画に取りかかり、五月初めに完成したとみられる。片山と股野はこれをおおいに賞賛したという。現在、東京国立博物館が所蔵するこの下絵は、当館の原画に比べて、右奥に遠景が加わり、空がひらけたことによつて全体的に少し明るい画面になつてゐる。壁掛の図案として装飾的な趣向をめざしていた浅井だが、宮内省からも川島からも写実的な方向性を示され、妥協せざるを得なかつたようである。

下絵の完成後、川島織物で綴織の制作がはじまり、その間当時の東宮御所には浅井の下絵が補筆をされて掛けられた。そのため川島織物には、都鳥と伊藤が模写をした下絵が渡されたようである。原寸大の部分試織をすすめる一方、明治四二年には原寸より小ぶりの《武士山狩図綴壁掛》（川島織物文化館蔵）が制作されている。なぜ綴織ではなく、刺繍作品が先に制作されたのかあきら

かではないが、この作品は翌年の日英博覧会に出品された。その後、浅井の弟子であった田中善之助（一八八九～一九四六）、黒田重太郎（一八七〇～一九七〇）によって綴織の織下絵が描かれ、大正二年（一九一三）頃には綴織が完成したとみられる。綴織は残念ながら第二次世界大戦の戦乱で焼損したが、現存している。

浅井忠《武士山狩図》 一九〇五年  
京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵



## 京都工芸繊維大学美術工芸資料館

### 【所在地】

〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎橋上町1  
TEL:075-724-7924 FAX:075-724-7920  
ホームページ<http://www.museum.kit.ac.jp/>

### 【交通アクセス】

- 市営地下鉄烏丸線「松ヶ崎駅」下車1 番出口から徒歩約8 分
- 京都バス「高野泉町」下車、西へ徒歩約10 分
- 叡山電車「修学院駅」下車、西へ徒歩約15 分

### 【開館時間】

10:00～17:00（入館は16:30まで）

### 【休館日】

日曜日・祝日（展覧会によって異なる場合あり）、展示替え期間、夏季休業期間、計画停電日、年末年始、入試日

### 【入館料】

一般200円、大学生150円、高校生以下無料

### 【展示予定】

企画展「建築家・瀧光夫一線と建築の対話を求めて」  
会期:2020年3月23日～6月6日  
\*期間中、1階展示室開室。ただし《武士山狩図》は2020年4月18日～6月14日まで「京都市京セラ美術館開館記念展「京都の美術 250年の夢」第1部 江戸から明治へ:近代への飛躍」に出品予定のため、下絵等の関連資料を展示する予定です。詳しくはお問合せ下さい。

なお、《武士山狩図》は、明治四〇年一〇月の第一回文部省美術展覧会に出品された。学校としてはおおいに面目を保ったが、浅井はあまり乗り気ではなかったようである。さらに浅井は同年一月に過労から急な病を得て、綴織の完成をみることなく帰らぬ人となった。入洛からわずか五年のことであった。

今、《武士山狩図》は、当館一階の展示室で重厚な光をたたえて鎮座している。入念な研究と新しい試み、さまざまな重圧と葛藤のなかで、浅井が自身のプライドにかけて制作した本作品は、一見の価値がある。

▼コロナウイルスの世界的な蔓延で、経済活動も大打撃をうけております。全国各地で、僧侶の祈禱が行われているのを聞き、この令和の時代にと、少し違和感を感じましたが、考えてみれば、病氣と人間とは、その時代毎に最新の治療法を試みできた長い歴史があります。『近代日本の病氣治療と呪術』(33頁)には、各々の時代の病氣への対処の仕方が論じられています。今の時代だからこそ、病氣と人間との歴史を学び、そして、そこから見えてくるものを、現代から未来へ役立てていければよいのですが。

また、日本の歴史は疾病だけでなく、火事・洪水・早魘・台風などの季節災害との戦いの連続でもありました。『貴族日記が描く京の災害』(24頁)では、貴族たちの日記の記述から平安京の季節災害とその要因を抽出し、歴史地理学の手法で視覚化することで、文字情報だけでは見えてこなかったリアルな平安京をかきあがらせてます。過去の貴重な記録と、現代の科学分析を結びつけることにより、すこしでも災害の被害を軽減できることを願います。

(一)

▼本号の校了直前に「祇園祭の山鉾巡行中止へ」という速報が入りました。4/17現在、京都文化博物館の休館に伴い「京都 祇園祭―町衆の情熱 山鉾の風流―」も休止となっておりますが図録だけでも是非ご覧ください。(m)

▼「月次祭礼図屏風模本」の拡大画像を見て、いきいきとした描写に魅了されました。書籍も乞うご期待。(M)

▼歴史年表等を見ると、感染症が与える影響は大きいと感じる。日記に詳しく書けば未来の史料になりそう。(大)

▼外出を避ける日々が続きます。家で楽しめる趣味は多々あれど、こんな時こそやはり読書ですね。(n)

▼したくとも出来ぬ事があり、したくなくともせざるを得ぬ事もある。望む事が出来るのは幸せな事。(き)

▼表紙図版・鉄砂虎鷲文壺(大阪市立東洋陶磁美術館蔵/安宅英一氏寄贈/六田知弘氏撮影)『韓国陶磁史の誕生と古陶磁ブーム』より

『鴨東通信』は年2回(春・秋)刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信 No.110

2020(令和2)年4月20日発行

発行 株式会社 思文閣出版

〒605-0089

京都市東山区元町355

tel 075-533-6860

fax 075-531-0009

e-mail pub@shibunkaku.co.jp

https://www.shibunkaku.co.jp/

publishing/

表紙デザイン HON DESIGN

佐野真人（皇學館大学准教授） 著

# 古代天皇祭祀・儀礼の史的研究

10月刊行

A5判上製・四二六頁／本体二、〇〇〇円

桓武天皇朝以降に見られるとされる天智天皇系皇統意識（新王朝意識）の見直しを出発点に、平安時代初期の桓武天皇朝・嵯峨天皇朝における儀礼の導入や整備、文徳天皇朝以降の儀礼の変遷や新たな儀礼の創出について考察を加えることで、平安時代前期を中心とした古代日本の儀礼秩序の構築過程の一端を明らかにする。

## 【目次】

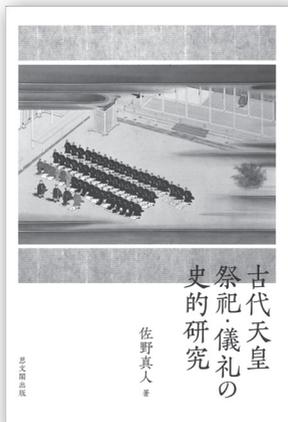
序論 本書の視点

### 第1部 桓武天皇朝の皇統意識再考と儀礼の導入

第1章 桓武天皇と儀礼・祭祀／第2章 日本における昊天祭祀の受容／第3章 奈良時代に見られる郊祀の知識―天平三年の対策と聖武天皇即位に関連して―／第4章 山陵祭祀より見た皇統意識の再検討／第5章 古代日本の宗廟観―「宗廟」山陵―概念の再検討―／第6章 「不改常典」に関する覚書

### 第2部 古代正月儀礼の整備と変質

第7章 天地四方拝の受容―「礼記」思想の享受に関連して―／第8章 唐帝拝礼作法管見―『大唐開元礼』に見える「皇帝再拝又再拝」表記について―／第9章 「儀仗旗」に関する一考察／第10章 正月朝覲行幸成立の背景―東宮学士滋野真主の学問的影響―／第11章 朝賀儀と天皇元服・立太子―清和天皇朝以降の朝賀儀を中心に―／第12章 延長七年元日朝賀儀の習礼―「醍醐天皇御記」・「更部王記」に見る朝賀儀の断片―／第13章 小朝拝の成立／第14章 皇后拝賀儀礼と二宮大饗／結論



皇學館大学神道研究所編

## 訓讀註釋 儀式 踐祚大嘗祭儀

「儀式」―「踐祚大嘗祭儀上・中・下」の訓讀・注釈研究の成果

本体一五、〇〇〇円

中野渡俊治 著

## 古代太上天皇の研究

奈良〜平安時代における太上天皇の地位の歴史的変遷を解明

本体五四〇〇円

京都大学文学部日本史研究室編

# 兵範記(四)・範圍記・知信記(全二冊)

4月刊行予定

A5判上製函入・影印篇五二六頁・翻刻篇三二〇頁／本体三〇、〇〇〇円

京都大学史料叢書『兵範記』シリーズ待望の最終巻。兵部卿平信範の日記『兵範記』(京都大学附属図書館蔵)の浄書本二五巻のうち、仁安三年正月〜承安元年二月までの五巻の影印を収録。本冊には同総合博物館所蔵の『兵範記 断簡』、信範の曾祖父・範圍の『範圍記』、父・平知信の『知信記』(ともに附属図書館蔵)それぞれの影印と翻刻を収録。さらに解題を付す。

## 【概略目次】

East Asian Bibliographic Traditions and Current Japanese Premodern Archives Studies (Jason P. Webb) / 近衛家家司平時兼の日記(御八講)(尾上陽介) / 失われた近世一条家文庫(林大樹) / 廣橋家本『辨官補任』(田島公) / 『諸道勘文 神鏡』「寛弘三年七月三日陣定文」(印南志帆) / 『定能卿記部類』三「行啓」・五「最勝講下」(藤原重雄) / 同四「宮待始并親王准后宣下記」(山岡暲) / 『院中御湯殿上日記』(遠藤珠紀) / 『樗叢抄』解題・影印(小倉慈司) / 『壬生地蔵絵詞』翻刻(石井悠加・藤原重雄) / 『近衛家藏書目録』翻刻(糸賀優理) / 高松宮家藏書目録一覧(吉岡真之ほか編)

田島公(東京大学史料編纂所教授) 編

# 禁裏・公家文庫研究 第七輯

3月刊行

B5判上製函入・三九〇頁／本体二五、〇〇〇円

京都大学文学部日本史研究室編

## 兵範記(一)(二)(三)

京都大学所蔵『兵範記』(重要文化財)の影印・翻刻

(各)本体一〇、五〇〇円

兵範記輪読会編

## 増補改訂 兵範記人名索引

史料大成本を底本に、男子部・女子部の2部構成

本体九、〇〇〇円

酒井茂幸著

## 禁裏本歌書の蔵書史的研究

禁裏本の総体を蔵書群として捉え、その伝来の歴史を跡付ける

本体五、六〇〇円

東京国立博物館古典籍叢刊編集員会編

## 九条家本延喜式(全5巻)

国宝・九条家本延喜式(紙背文書も含む)の影印・翻刻

(各)本体一五、〇〇〇円

片平博文（立命館大学名誉教授）著

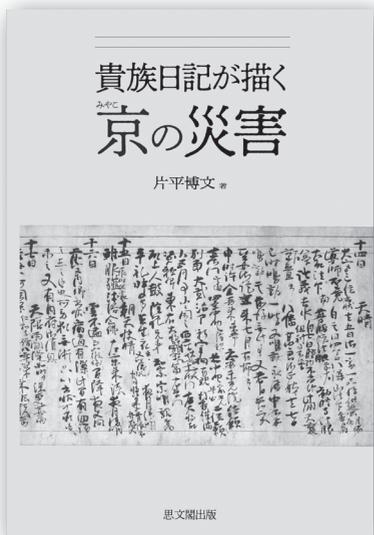
# 貴族日記が描く京の災害

3月刊行

A5判上製・四一六頁／本体五、〇〇〇円

繰り返して起こる自然災害。これほど多くの災害が起きた場所にも拘わらず、なぜ人々は京の都に住み続けたのだろうか。そればかりか、なぜ被災後には速やかに都市を復旧・復興させ、以前にも増して発展させることができたのか。

本書は、平安・鎌倉期の貴族の日記から平安京の季節災害とその要因（火事、洪水、旱魃、台風）を抽出し、文字情報を歴史地理学の手法で空間情報に置き換えて視覚化することで、日記をただ読むだけでは見えてこない平安京の姿を浮かび上がらせる。これは、千年を超える都に残された、現代人への貴重なメッセージである。



## 目次

- はじめに
- 第1編** 歴史時代の災害に学ぶ  
—平安の京に残された記録から—
- 第1章 京都で描く歴史時代の災害  
第2章 歴史災害のとりえ方
- 第2編** 京の人びとを震撼させた「火」の連鎖  
—火災の季節と恐るべき火の威力—  
第3章 市街地の3分の1を気に焼き尽くした大火災  
—室の大火—  
第4章 鴨川を越えた大火災  
—建元元年三月十三日の大火—
- 第3編** 「水」の襲来と京を流れた河川  
—洪水の季節と歴史—  
第5章 8世紀末〜14世紀末の記録から—  
—白河法皇と「賀茂河の水」—  
第6章 平安京北郊における有栖川の流れ  
第7章 12〜13世紀における平安京北辺の風景とその変化—西瀬川と「小川」との関係—  
第8章 同時に溢れた京域内の河川  
第9章 貞和五年（966）における堀川および鴨川の洪水—
- 第4編** 京を直撃した「風」の猛威  
—京を襲った歴史時代の台風—  
第10章 9〜14世紀のデータベースから—  
—京の歴史に残った個性的な台風—  
—個別の台風からの分析—
- 第5編** 京の災害と被害に学ぶ知恵  
—激しい「水」と「旱」の相克—  
第11章 洪水と旱魃との関係—  
第12章 終わりなき災害への対応と都市祭礼  
第13章 歴史時代の災害から何を学ぶか—終章に代えて—  
第14章 あとがき  
第15章 索引

橋本政宣・宇野日出生編

# 賀茂信仰の歴史と文化

〔神社史料研究会叢書Ⅵ〕

4月刊行予定

A5判上製・二四〇頁／本体七、八〇〇円

山本信吉・東四柳史明編

# 社寺造営の政治史〔神社史料研究会叢書Ⅱ〕

政治・経済的側面から、その歴史的意義と実態を明かす9篇

本体六、五〇〇円

藺田稔・福原敏男編

# 祭礼と芸能の文化史〔神社史料研究会叢書Ⅲ〕

祭場・舞台として繰り広げられる祭礼と芸能を特集した9篇

本体六、五〇〇円

嵯峨井建著

# 神仏習合の歴史と儀礼空間〔オンデマンド版〕

儀礼空間を視点に論じ、神仏習合の実態を明らかにする

本体八、六〇〇円

ジョン・ブリン編

# 変容する聖地 伊勢

古代から近・現代まで、伊勢神宮の変容の歴史を繙く16篇

本体二、八〇〇円

【おもな内容】 賀茂社祭神とその歴史の変遷（嵯峨井建）／建築と祭

儀から見た賀茂社本殿の意義（黒田龍二）／賀茂御祖神社殿の変遷（京  
條寛樹）／鴨社古図（賀茂御祖神社絵図）と賀茂社御参籠（樋笠逸人）  
／上賀茂社の忌子（森本ちづる）／上賀茂神社競馬会神事の儀式次第  
の変遷（山本宗尚）／賀茂下上社の雨乞いと朝廷の祈雨再興（間瀬久美  
子）／「御棚会神事と賀茂六郷」補遺（宇野日出生）

棚町知彌・橋本政宣編

# 社家文事の地域史〔神社史料研究会叢書Ⅳ〕

社家における和歌・連歌等の文化活動に焦点をあてた10篇

本体七、五〇〇円

福山林繼・宇野日出生編

# 神社継承の制度史〔神社史料研究会叢書Ⅴ〕

神社が継承されてきた諸問題を制度史の視点で論究した9篇

本体七、五〇〇円

宇野日出生著

# 八瀬童子―歴史と文化―〔オンデマンド版〕

関係文書や八瀬の地に残る習俗からその歴史と文化を紹介

本体四、五〇〇円

山澤学著

# 日光東照宮の成立

―近世日光山の「荘厳」と祭祀組織―〔オンデマンド版〕

本体八、五〇〇円

岩永てるみ（愛知県立芸術大学准教授）

阪野智啓（同右准教授）

高岸輝（東京大学准教授）

小島道裕（国立歴史民俗博物館教授） 編

# 「月次祭礼図屏風」の復元と研究

—よみがえる室町京都のかがやき—

4月刊行

A4判上製・二四四頁／本体 二六、〇〇〇円

## 応仁の乱以前の京都を描いた唯一の屏風、ここに復元

東京国立博物館所蔵「月次祭礼図屏風模本」は、江戸時代に「月次祭礼図屏風」を写したもので、その失われた原本は、室町時代中期のものであったと考えられている。

応仁の乱以前の京都の風俗を描いた屏風は他になく、この模本は貴重な絵画資料となっているが、彩色は不完全であり、欠損もあるため、元の絵画がどのようなようであったかは不明な点が多かった。

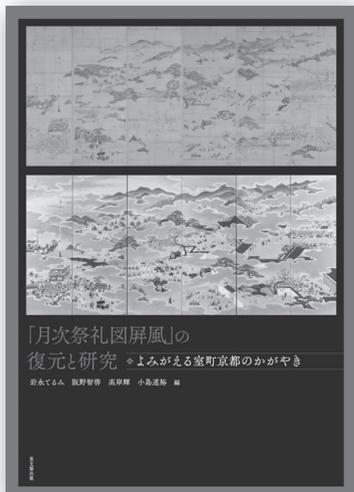
愛知県立芸術大学を中心に、日本画、美術史、文献史学など多方面の専門家の協働により学際的に原資料の復元が試みられ、その過程でさまざまな新知見が得られた。ペールに包まれた室町時代の京都に光をあてる画期的プロジェクトの成果を公開。

三浦圭一著

## 中世民衆生活史の研究【オンデマンド版】

主に畿内地域の民衆生活に関する諸論稿を収録

本体 九、〇〇〇円



「月次祭礼図屏風」の復元と研究

岩永てるみ、阪野智啓、高岸輝、小島道裕 編

序文

【図版編】

「月次祭礼図屏風模本」

復元「月次祭礼図屏風」

做古／様式／景観／技法／材料／工程

（岩永てるみ）

【論考編】

「月次祭礼図屏風模本」の画像復元について

「月次祭礼図屏風模本」復元技法の色と表現

室町やまと絵のなかの「月次祭礼図屏風」

東京国立博物館所蔵模本類と

「月次祭礼図屏風模本」について

「月次祭礼図屏風」に描かれた幕府と神社

「月次祭礼図屏風」に描かれた室町期の祇園会

（阪野智啓）

（中神敏子）

（高岸輝）

（瀬谷 愛）

松本郁代・出光佐千子・杉子女王編

## 風俗絵画の文化学Ⅲ― 瞬時をうつすフィロソフィー―

「風俗絵画研究会」の文化学的探究の研究成果【第3弾】

本体 七、〇〇〇円

京都文化博物館企画・編集

# 京都 祇園祭 — 町衆の情熱・山鉾の風流 —

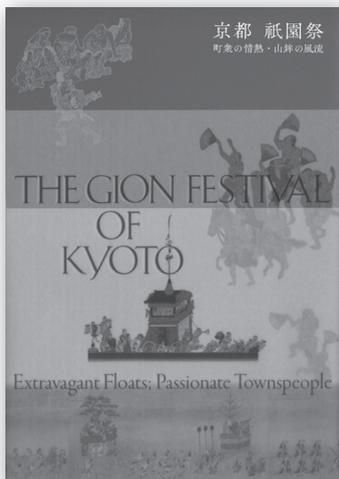
3月刊行

2020年3月24日〜5月17日

に京都文化博物館で開催の同名展公式カタログ兼書籍。

災厄が降りかかるたびに、最高水準の芸術でもって復興を遂げてきた祇園祭の山鉾。その希少な懸装品や装飾品等から、祇園祭の歴史、現代に至るまでの様々な復興の様子を通覧する。

B5判並製・二五〇頁／本体二、五〇〇円



京都祇園祭 — 行事を支える人々と山鉾の美 — (村上忠喜)

【図版】

- 序章 描かれた山鉾巡行
- 第一章 記録される祇園祭と山鉾巡行
- 第二章 山鉾を彩る — 飾金具の競演 —
- 第三章 山鉾を彩る — 懸装品の美 —
- 第四章 神格化される祇園祭の山鉾
- 第五章 近代化と祇園祭の山鉾
- 終章 そして新しい時代へ

【コラム】

- 占出山の懸装品と技術革新 (橋本章)
- 山鉾に筆を揮った絵師たち (有賀茜)
- 中近世の祇園会神輿とその担い手 (西山剛)

山鉾紹介／現在の山鉾所在／山鉾巡行コース変遷／祇園祭関連年表

【論考】

- 祇園祭山鉾の金工 (久保智康)
- 祇園祭・染色幕と懸装 — 話題の幕を中心に — (藤井健三)
- 祇園祭の山鉾と信仰 (橋本章)

八反裕太郎著

## 描かれた祇園祭 — 山鉾巡行・なりもの研究 —

祇園祭を描いた絵画作品から、祭儀の変遷を読み解く試み

本体一五、〇〇〇円

河内将芳著

## 中世京都の都市と宗教 (オンデマンド版)

都市社会と宗教・信仰との関係についてその実態を問い直す

本体六、八〇〇円

大阪天満宮文化研究所編

## 天神祭 — 火と水の都市祭礼 —

天神祭の歴史を豊富な図版と論考8篇で多面的に明かす

本体二、六〇〇円

岩間香・西岡陽子編／京極寛写真

## 祭りのしつらい — 町家とまち並み —

祭り飾りや造り物など、町家とまち並みを飾る祭りの文化を紹介

本体二、〇〇〇円

中島楽章（九州大学准教授）著

# 大航海時代の 海域アジアと琉球

—レキオスを求めて—

5月刊行予定

A5判上製・六〇〇頁／本体九、五〇〇円

序章 古琉球海外交流史とヨーロッパ史料

【第一部 世界図と東アジア】

第1章 世界図の発達と東アジア——ポトレマイオス図からカヴェリ図まで

第2章 フランシスコ・ロドリゲスの地図(一)——ポルトガルの海域アジア進出と世界図

第3章 フランシスコ・ロドリゲスの地図(二)——最初のポルトガル系東アジア図

第4章 ジバングとハリオコ——大航海時代初期の世界図と日本

【第二部 ゴーレスとレキオス】

第5章 ゴーレス再考(一)——アル・ゲールとゴーレス

第6章 ゴーレス再考(二)——その語源問題をめぐって

平尾良光・飯沼賢司・村井章介編

## 大航海時代の日本と金属交易

〔別府大学文化財研究所企画シリーズ②〕

本体三、五〇〇円

菊池誠一編

## 朱印船貿易絵図の研究

精彩なカラー図版に、多彩な研究者による論考6篇を収録

本体七、八〇〇円

大航海時代、海域アジアへ進出したヨーロッパの航海者や現地で勤務した商務官などがもたらす情報により、この地域に対するヨーロッパの地理情報は飛躍的に発達した。一方この時期の東南アジアは「交易の時代」を迎え、中継貿易で栄えた琉球王国も盛んに活動していた。こうしたなかでヨーロッパ人たちが探し求めた伝説的なレキオス（琉球）も現実の地理認識のなかに組み込まれていく。

本書ではこれまで十分に活用されてこなかったヨーロッパの文献、地図などを縦横に用いることで、海域アジアの全体状況、ヨーロッパにおける地理認識の変化、さらに漢籍等の公式的な史料からではとらえきれない古琉球期の琉球王国の活動を多角的に解明する。

第7章 マラッカの琉球人(一)——「歴代宝案」にみる

第8章 マラッカの琉球人(二)——ポルトガル史料にみる

【第三部 レキオスを求めて】

第9章 レキオスは何処に——ポルトガル人の琉球探索と情報収集

第10章 マゼランとレキオス——スペインのアジア進出と琉球認識

第11章 レキオス到達(一)——一五四二年、ポルトガル人の琉球漂着

第12章 レキオス到達(二)——琉球情報の伝播と変容

終章 大航海時代の琉球王国

田中健夫著

## 対外関係と文化交流(オンデマンド版)

中近世日本の東アジアを中心とした対外関係と文化交流の論考

本体一三、八〇〇円

琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究会編

## 琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究

第二尚氏、明治前期の景観を描いた大型図版絵画史料集成

本体一八、五〇〇円

米家泰作（京都大学准教授）著

# 森と火の環境史

—近世・近代日本の焼畑と植生—

11月刊行

A5判上製・六〇八頁／本体七、五〇〇円



火を用いた人と環境との関わりとして焼畑をとらえ、焼畑の近世的展開と「進化」、土地制度史と焼畑、火と植生のポリテクス（政治）を問う。「人為の火」という観点から、日本の焼畑の歴史地理と環境史を再考する試み。

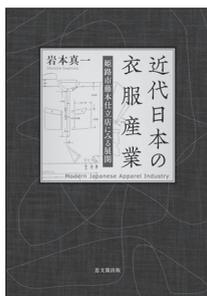
岩本真一（大阪市立大学特任助教）著

# 近代日本の衣服産業

—姫路市藤本仕立店にみる展開—

10月刊行

A5判上製・三二八頁／本体七、〇〇〇円



兵庫県姫路市の小規模裁縫業者（藤本仕立店）の家文書を主な史料としながら、戦時経済統制や他産地の動向など、時代の流れに翻弄された同家の実態を浮き彫りにすることで、新たな切り口から近代衣服産業の展開を描く。

岡本貴久子著

# 記念植樹と日本近代

—林学者本多静六の思想と事績—

本多静六に注目し、近代国家形成のあゆみに記念植樹を位置づける

本体九、〇〇〇円

谷彌兵衛著

# 近世吉野林業史（オンデマンド版）

史料に基づき、吉野林業の光と影を実証的に明らかにする

本体二、一〇〇円

岩本真一著

# ミンシンと衣服の経済史

—地球規模経済と家内生産—（オンデマンド版）

本文篇で翻訳を、資料篇で原典および関連資料を掲載

本体六、六〇〇円

桑田優著

# 伝統産業の成立と発展

—播州三木金物の事例—

特産品が全国市場へ進出してゆく過程を跡付ける通史

本体六、五〇〇円

ジラルデッリ青木美由紀（美術史家）編著

# オスマン帝国と日本趣味 ジャポニスム

今夏刊行予定

A5判上製・三〇〇頁／本体六、五〇〇円

フランスを中心にジャポニスムが流行した時代、日本趣味の美術工芸品はアジアとヨーロッパにまたがるオスマン帝国の諸宮殿にももたらされ、宮廷を彩っていた。これらの品々はボスフォラス海峡に臨むイスタンブルの地に、どのような経緯で、いかにしてもたらされたのか？日本製あるいは外国製による日本趣味の美術工芸品を陶磁器・金工・刺繍・寄木細工等の専門家が現地調査した成果をもとに、草創期の日本・トルコの交流、そしてヨーロッパ周辺に及んだもうひとつのジャポニスムの諸相を明らかにする。

寺本敬子著

## パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生

日仏両国の史料を駆使し、ジャポニスムの誕生を解き明かす

〔好評3刷〕

本体六、五〇〇円

佐野真由子編

## 万国博覧会と人間の歴史

多様な領域の研究者、政府・業界関係者らによる共同研究25篇

本体九、二〇〇円

### 〔予定目次〕

総論（ジラルデッリ青木美由紀）

ドルマバフチェ宮殿の「SATSUMA」（渡辺秀郎）

日本磁器の始まりとトルコの近代宮殿所蔵の有田磁器の特色（大橋康二）

〔コラム1〕万博を通じた日本工芸品の広がり——有田焼の場合（藤原友子）

〔コラム2〕ドルマバフチェ宮殿が収蔵する寄木のライティングビュロー（金子皓彦）

ドルマバフチェ宮殿所蔵の日本製金工品（清水克朗）

〔コラム3〕トルコのコーヒー文化（ヤマンラール本野美奈子）

〔コラム4〕イスタンブルのジャポニスムとアール・ヌーヴォー（ジラルデッリ青木美由紀）

オスマン帝国の宮殿を彩った日本の刺繍（松原史）

〔コラム5〕東から西から——イスタンブル賞頭人名録（ジラルデッリ青木美由紀）

〔コラム6〕山田寅次郎——日本とトルコの友好の礎を築いた男（谷田有史）

近代オスマン宮廷の美意識と日本（ジラルデッリ青木美由紀）

索引

天貝義教著

## 応用美術思想導入の歴史

——ウィーン博参同より意匠条例制定まで——

本体七、五〇〇円

デザイン史フォーラム編

## 国際デザイン史——日本の意匠と東西交流——

豊富な挿図を掲載、日本と西洋諸国との交流を探る56篇

〔5刷〕

本体二九〇〇円

鄭銀珍 (大阪市立東洋陶磁美術館学芸員) 著

# 韓国陶磁器史の誕生と古陶磁ブーム

3月刊行 A5判上製・四六六頁／本体一四、〇〇〇円



「高麗青磁」と「朝鮮白磁」に代表される韓国古陶磁。19世紀中葉以降の近代化にともない、在来の日用品的な陶磁器が廃れていく一方で、古陶磁が「美術品」として「再発見」され、収集、鑑賞、そして研究が本格化した。その中で大きな役割を担ったのが浅川伯教・巧の兄弟である。韓国の人々とその文化に心を寄せた二人は、民芸運動の創始者である柳宗悦にも決定的な影響をあたえた。本書は、浅川兄弟の活動を軸として、近代における韓国陶磁史の誕生と古陶磁ブームの全容を鮮やかに浮かび上がらせる。

竹内順一、岡佳子、ルイズ・コート、アンドリュウ・M・フツキー編

## 「千種」物語―つうの海を渡った唐物茶壺―

唐物茶壺「千種」が辿った経緯を当時の多様な文化事象とともに語る  
本体三、二〇〇円

依田徹著

## 近代の「美術」と茶の湯―言葉と人とモノ―

近代美術史の視点から、明治以降の茶道用具の評価を捉え直す  
本体六、四〇〇円

### (目次)

序章	
第I部	東アジアの近代化と陶磁産業
第一章	近代日本の陶磁輸出―アメリカ、中国、朝鮮
第二章	日本産業陶磁の朝鮮半島への進出
第三章	日韓両国内の陶磁生産の状況
第II部	高麗青磁の再発見とその再現
第四章	韓国陶磁研究の始まり
第五章	高麗青磁再現史
第III部	朝鮮白磁の美の発見
	―民芸運動の萌芽と韓国陶磁産業への展望―
第六章	朝鮮白磁の美の発見
第七章	浅川兄弟の方法論と朝鮮民俗調査
第八章	地方への視点―新たな陶磁産業への展望
補論	学術調査と古陶磁ブーム
結論	

朴珉廷著

## そそうの哲学―数寄茶湯の原点―

藝道における修行論の研究を通して見出す「籠相」の哲学試論  
【好評2刷】  
本体五、〇〇〇円

小林仁著

## 中国南北朝隋唐陶俑の研究

膨大な資料を整理し、豊富な図版とともに論じる新たな陶俑研究  
本体一三、〇〇〇円

奈良国立博物館編

# 正倉院宝物に学ぶ3

10月刊行

四六判並製・三七六頁／本体三、〇〇〇円

奈良国立博物館編

# 正倉院宝物に学ぶ2

四六判並製・三四八頁／本体二、五〇〇円

木村法光著

# 正倉院宝物と古代の技

古代の匠が用いた技術が優れていた理由を探る永年の研究成果

本体一五、〇〇〇円

尾形充彦著

# 正倉院染織品の研究

研究職技官であった著者による正倉院染織品研究の集大成

本体二〇、〇〇〇円



日々、宝物の保存と修理に携わる宮内庁正倉院事務所の研究者をはじめ、東大寺・奈良国立博物館ゆかりの国内外の研究者が、正倉院宝物の様々な面を報告・討論するシンポジウム。

## 【収録】

2011～2013年正倉院学術シンポジウム「正倉院のはじまりと国家珍宝帳」「正倉院宝物の近代」「鑑真和上と正倉院宝物」

## 【収録】

2008～2010年正倉院学術シンポジウム「正倉院研究の現在」「皇室と正倉院宝物」「正倉院宝物はどこで作られたか」

米田該典著

# 正倉院の香薬―材質調査から保存へ―

有機物の「文化財」保存とは何かを問う先駆的な研究成果

本体一〇、〇〇〇円

近藤好和著

# 日本古代の武器―「国家珍宝帳」と正倉院の器仗―

正倉院の器仗(武器)を詳細に解説、多数の図版掲載

本体八、五〇〇円

小山聡子（二松学舎大学教授）編

# 前近代日本の 病氣治療と呪術



4月刊行予定

A5判上製・三〇六頁／本体八、〇〇〇円

人間にとって、病との闘いは永遠のテーマである。それゆえ、病への対処法には、その時代の人々の信仰や思想、世界観が如実に表れる。前近代では、病氣の原因は神やモノノケ等、霊的なものに求められ、その治療は宗教者の呪術に任されていた。僧侶や陰陽師らの行った呪術による病氣治療の実態とその全体像を、古代から近世まで多角的に論じること、それぞれの時代に生きた人々の精神世界に迫る。

小山聡子・松本健太郎編

## 幽霊の歴史文化学

様々な研究分野から日本人の精神世界の一端に迫る

本体二、五〇〇円

京都橋大学女性歴史文化研究所編

## 医療の社会史―生・老・病・死―

医療の社会的展開が窺える通史的企画（論文9本・コラム4本収録）

本体二、八〇〇円

### 〔目次〕

#### 第一部 「東アジアの視点からの問い直し」

牧角悦子 「中国古代の祭祀形成―呪術から祭祀へ・祭祀から儀礼へ」  
張麗山 「東アジアの視点から見る日本陰陽道の病氣対策  
―「土公病」を例に―」

佐々木聡 「清末以降の発病占の変容とその社会史的意義  
―三十日病占から六十日病占へ―」

#### 第二部 「古代・中世の様相」

水口幹記 「日本靈異記」所載の目盲説話をめぐって  
―その「政治的」側面について―

大江篤 「神祇官下部と病」

小山聡子 「平安時代におけるモノノケの表象と治病」  
赤澤春彦 「日本中世における病・物氣と陰陽道」

#### 第三部 「近世における展開」

齋藤英喜 「病氣治療と神話・祈禱  
―「土公鎮祭」から「大土公神祭文」へ―

町泉寿郎 「江戸時代医学史からみた病氣治療と運氣論」  
山田雄司 「忍術書に見る病氣治療」

近藤瑞木 「神職者たちの憑靈譚―「事実証談」の世界―

川村純一著

## 文学に見る痘瘡

46の文学作品から民衆の疾病概念や医療事情を浮き彫りにする

本体五、〇〇〇円

奥沢康正著

## 京の民間医療信仰

京都市内寺社の民間医療信仰を紹介する異色の京都案内 ※美本なし

本体二、八〇〇円

# 2017年～2018年刊行一覧

## ◆史料

- 東寺廿口供僧方評定引付 第三卷 伊藤俊一・富田正弘・本多俊彦編 六、五〇〇円  
 東寺廿口供僧方評定引付 第四卷 伊藤俊一・富田正弘・本多俊彦編 六、五〇〇円  
 東寺百合文書(十三)―I函(二)・又函― 京都府立京都学・歴史館編 一三、五〇〇円  
 禁裏・公家文庫研究 第六編 田島公編 一五、〇〇〇円  
 中世国語資料集―龍谷大学善本叢書三三― 一七、四〇〇円  
 住友史料叢書三三―I札差証文(二)― 住友史料館編 八、〇〇〇円  
 住友史料叢書三三―I年々記(二)― 住友史料館編 九、五〇〇円  
 吉田清成関係文書(七)〔京都大学史料叢書六〕 京都大学文学部日本史研究室編 二二、〇〇〇円

## ◆古代・中世

- 古代太上天皇の研究 中野渡俊治著 五、四〇〇円  
 日本の時空観の形成 吉川真司・倉本宏編 一一、五〇〇円  
 古代・中世の地域社会―ムラの戸籍簿―の可能性― 大山喬平・三枝暁子編 九、〇〇〇円  
 法隆寺史 上―古代・中世― 法隆寺編 六、八〇〇円  
 桃裕行著作集 第一巻―修訂版―上代学制の研究―オンデマンド版― 桃裕行著 一五、二〇〇円  
 桃裕行著作集 第二巻―上代学制論攷―〔オンデマンド版〕 桃裕行著 一三、九〇〇円  
 桃裕行著作集 第四巻―古記録の研究(上)―〔オンデマンド版〕 桃裕行著 八、九〇〇円  
 桃裕行著作集 第七巻―歴法の研究(上)―〔オンデマンド版〕 桃裕行著 九、七〇〇円

- 『御堂関白記』の研究 倉本宏著 大津透・池田尚隆編 六、〇〇〇円  
 中世禁裏女房の研究 松園亨著 八、〇〇〇円  
 高雄山神護寺文書集成 坂本亮太・末柄豊・村井祐樹編 一二、五〇〇円  
 日本中世の民衆・都市・農村 小西瑞忠著 八、五〇〇円

- 守護所・戦国城下町の構造と社会―阿波国勝瑞― 石井伸夫・仁木宏編 六、六〇〇円  
 豊臣政権の東国政策と徳川氏〔佛教大学研究叢書〕 片山正彦著 九、〇〇〇円  
 楽市楽座令の研究 長澤伸樹著 九、〇〇〇円  
 戦国期六角氏権力と地域社会 新谷和之著 九、〇〇〇円

## ◆近世・近代

- 近世の開幕と貨幣統合―三貨制度への道程― 高木久史著 六、五〇〇円  
 徳川吉宗の武芸奨励―近世中期の旗本強化策― 横山輝樹著 七、五〇〇円  
 日本地誌編纂史の研究―オンデマンド版― 白井哲哉著 九、二〇〇円  
 訓読 豊後国志 太田由佳訳・松田清注 七、〇〇〇円  
 調理堂所蔵 京都小石家来簡集 小石家文書研究会編 一四、四〇〇円  
 近代日本の空間編成史 中川理編 七、八〇〇円  
 近代日本の歴史都市―古都と城下町―〔オンデマンド版〕 高木博志編 一二、〇〇〇円  
 植民地朝鮮の勸農政策 土井浩嗣著 七、三〇〇円  
 大名庭園の近代 小野芳朗・本康宏史・三宅拓也著 九、〇〇〇円

## ◆宗教

- 東陽英朝少林無孔笛訳注(二) 芳澤勝弘編著 一三、〇〇〇円

## ◆芸術・美術

- 慶安手鑑 増田孝・日比野浩信編 四、〇〇〇円  
 新・小堀遠州の書状 小堀宗実著 四、二〇〇円  
 江戸宗玩 欠伸福訳注 画賛篇 芳澤勝弘編著 八、〇〇〇円  
 京都 近代美術工芸のネットワーク 並木誠士・青木美保子編 二、五〇〇円  
 園城寺の仏像 第二巻 平安彫刻篇Ⅰ 園城寺の仏像編纂委員会編 一八、〇〇〇円  
 園城寺の仏像 第三巻 平安彫刻篇Ⅱ 園城寺の仏像編纂委員会編 一八、〇〇〇円  
 寧楽美術館の印章―一方寸にあふれる美― 久米雅雄監修・寧楽美術館編集 四、〇〇〇円

- 香道的美学―その成立と王権・連歌― 濱崎加奈子著 五、〇〇〇円  
 円山応挙論 冷泉為人著 九、五〇〇円

描かれた祇園祭―山鉾巡行・ねりもの研究― 八反裕太郎著 一五、〇〇〇円  
 文人画 往還する美 河野元昭著 一五、〇〇〇円  
 能管の演奏技法と伝承 森田都紀著 八、〇〇〇円  
 猿筆と面―大和・近江および白山の周辺から― MITHOMUSEUM編 三、二〇〇円  
 絵入謡本と能狂言絵 神戸女子大学古典芸能研究センター編 四、二〇〇円  
 岡倉天心 五浦から世界へ 茨城大学社会連携センター・五浦美術文化研究所編 三、二〇〇円

◆文化史

アーカイブズの構造認識と編成記述「オンデマンド版」

国文学研究資料館編

李子伝二十四孝の研究「オンデマンド版」 黒田彰著

世界遺産と天皇陵古墳を問う 今尾文昭・高木博志編

海賊史観からみた世界史の再構築―交易と情報流通の現在を問い直す― 稲賀繁美編

パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生 寺本敬子著

天皇のダイニングホール―知られざる明治天皇の宮廷外交― 山崎鯛介・メアリー・レッドフーン・今泉宜子編

茶の湯空間の近代―世界を見据えた和風建築― 桐浴邦夫著

庭と建築の煎茶文化―近代数寄空間をよみとく― 尼崎博正・麓和善・矢ヶ崎善太郎編

異邦から／へのまなざし―見られる日本・見る日本― 白幡洋三郎・劉建輝編著

動員のメディアミックス―(創作する大衆)の戦時下・戦後― 大塚英志編

広告の夜明け―大阪・萬年社コレクション研究― 竹内幸絵・難波功士編

学問をしるもの 井上章一編

ウアナキユノ文化と現代社会 ウェルズ恵子編

熊倉功夫著作集 第四巻 近代数寄者の茶の湯 熊倉功夫著

熊倉功夫著作集 第五巻 寛永文化の研究 熊倉功夫著

熊倉功夫著作集 第六巻 民芸と近代 熊倉功夫著

熊倉功夫著作集 第七巻 日本料理文化史 熊倉功夫著

和食文化ブックレット⑥ 食材と調理 一般社団法人和食文化国民会議監修

和食文化ブックレット⑦ うま味の秘密 一般社団法人和食文化国民会議監修 九〇〇円  
 和食文化ブックレット⑧ ふるさとの食へもの 一般社団法人和食文化国民会議監修 九〇〇円  
 和食文化ブックレット⑨ 和菓子と日本茶 一般社団法人和食文化国民会議監修 九〇〇円  
 和食文化ブックレット⑩ 和食と日本酒 一般社団法人和食文化国民会議監修 九〇〇円  
 和食手帖 一般社団法人和食文化国民会議監修 九〇〇円  
 地域名菓の誕生「オンデマンド版」 橋爪伸子著 一、五〇〇円  
 十九世紀日本の園芸文化―江戸と東京、植木屋の周辺―「オンデマンド版」 平野恵著 一〇、九〇〇円  
 技術と文明四〇(二)巻号 日本産業技術史学会編 二、〇〇〇円  
 技術と文明四二(二)巻号 日本産業技術史学会編 二、〇〇〇円  
 ミシンと衣服の経済史―地球規模経済と家内生産―「オンデマンド版」 岩本真一著 六、六〇〇円

◆オンデマンド復刊案内

藤田英夫著

大阪舎密局の史的展開―京都大学の源流― 「初版一九九五年」

多数の資料・文献調査に基づき、化学史という視点から解き明かす 本体六、〇〇〇円

桃裕行著

桃裕行著作集 第八巻 曆法の研究(下) 「初版一九九五年」

本体六、七〇〇円

菱田哲郎・吉川真司編

古代寺院史の研究 「初版二〇一九年」

主に畿内・周辺地域の古代寺院に関する論考と最新の調査知見

本体一三、〇〇〇円

2020年夏〜2020年秋 主な刊行予定

古代寺院史の研究(オンデマンド版)

菱田哲郎・吉川真司編

儀礼・象徴・意思決定(仮)

河内祥輔、小口雅史、M・メルジオウスキ、E・ウィッター編

図説 大名庭園の近代

小野芳朗・本康宏・中嶋節子・三宅拓也編

万博学(仮)

佐野真由子編

占領下日本の地方都市

―接收された住宅と都市空間―(仮)

大場修編

竹内栖鳳 水墨風景画にみる画境(仮)

藤木晶子著

東陽英朝 少林無孔笛訳注(三)

芳澤勝弘編著

近世歌舞伎と演劇書(仮)

廣瀬千紗子著

鳥居龍蔵の学問と世界(仮)

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館・鳥居龍蔵を語る会編

東寺百合文書(十四)

京都府立京都市・歴史館編

『今昔物語集』の成立と対外観

荒木浩著

中世禅宗の儒学学習と科学知識

川本慎自著

鈴木大拙を顧みる(仮)

山田燮治、ジョン・ブリン編

思文閣グループの  
逸品紹介

# 美の縁



青帯黄卷  
掛在壁間  
主は何者  
拾得寒山

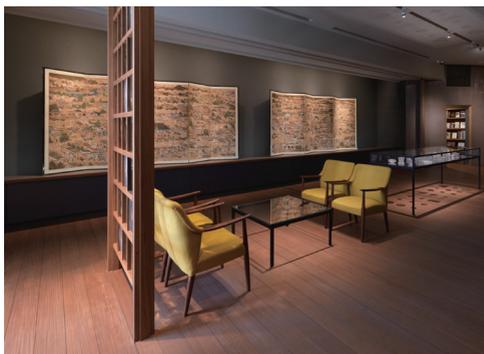
青帯と黄巻と、掛けて壁間にあり。主は是れ何者ぞ、拾得と寒山なり。

## 寒山拾得 与謝蕪村

寒山と拾得は中国の唐代にいたとされる僧のことで、奇矯なふるまいや俗世から離れた生き様が知られる。寒山は文殊菩薩、拾得は普賢菩薩の化身とされ、しばしば禅画の画題として用いられてきた。寒山が経巻を、拾得が箒を持っていたとされることから、二人の姿と共にそれら二つの道具が描かれることも多いが、本画では経巻と箒のみをもって寒山拾得を示している。このように背景や道具のみを表すことでその主題を示す描き方を留守模様と呼ぶ。

「菜の花や月は東に日は西に」など現在まで知られる名句を残す俳人でありながら、池大雅との合作である国宝「十便十宜図」など、画人としても蕪村は高い評価を受ける。多角的な面からの表現方法を探り続けた蕪村だからこそ生み出せるものがあるのだろう。本画においても、勢いの良い筆使いで描かれた箒と経巻に、自作の詩が添えられたシンプルな構図だが、蕪村の力のこもり過ぎない洒落気の中にしつかりとした教養も感じることができる。

(思文閣海外営業部・清水怜香)



我々思文閣は日本の優れた文化を  
育み、伝え、広める事により一人でも多くの人々に  
感動と豊かな心を与え続ける企業を目指します。

SHIBUNKAKU  
**思文閣**

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355  
**TEL (075) 531-0001** FAX(075)531-5533  
<https://www.shibunokaku.co.jp/>  
[info@shibunokaku.co.jp](mailto:info@shibunokaku.co.jp)

## 思文閣古書資料目録



明智合戦(『太閤記』の内) 一冊

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・  
錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております  
(年3回程度発行)。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い  
合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355  
**TEL (075) 752-0005** FAX(075)525-7155  
<http://www.shibunokaku.co.jp/kosho/>  
[kosho@shibunokaku.co.jp](mailto:kosho@shibunokaku.co.jp)

## 思文閣 査定申込みアプリ

お手持ちのスマートフォン・タブレットで簡単に査定申込みができます。  
「お宝鑑定!思文閣-美術品査定申込」アプリをリニューアルいたしました。



- 画像をシリアルに見やすく設定いたしました。
- 撮影が子どもの写りを追加変更いたしました。
- 古文書や印刷物の写真撮り方でお使いいただける  
ようにしました。
- ※お宝鑑定をお使いの方は、iOS版の新規ダウン  
ロードをお願いします。



「思文閣」で検索、無料ダウンロード

SHIBUNKAKU  
**思文閣**



ぎやらしい思文閣では、絵画・陶芸など  
様々な展覧会を開催いたします。  
皆様のお越しを心よりお待ちしております。

## ぎやらしい思文閣

京都市東山区古門前通大和大路東入元町386  
**TEL (075) 761-0001** [gallery@shibunokaku.co.jp](mailto:gallery@shibunokaku.co.jp)  
[www.shibunokaku.co.jp/gallery/](http://www.shibunokaku.co.jp/gallery/)